

幸せは石けんの香り

川口 かおり

新しい石けんの封を開ける時のように、私は五十一才の朝を迎えました。世界中の何処を探しても、こんなに幸せな五十一才はいないと、そう思いながら。

森の坂道の上にあるこの小さな家から見降ろすと、二月の朝五時半の風景は、まだ昨夜のままの星と街のあかりが美しく瞬いています。私は窓を開けベランダに出ると、すぐ左側に見える桜の木に囲まれた池のほとりを住処にする一羽の鳥の姿を、いつものように探します。そして、冷たい風を頬に受け深呼吸すると、今日も幸せな気持ちが溢れ出してくるのです。

「おはよう、私五十一才になったよ。」

ささやくように小さな声で、夫を起こします。

「イチローと一緒！」（背番号）

嬉しさと、そしてこの年齢を何とか楽しもうという気持ちから、そういうと、よく眠っていた彼もやっと声を出して笑いました。

「今日はケーキを買って早く帰って来るからね。」

微笑みながらいつもより遅くなってしまった出発時刻に焦り、彼は小走りで駐車場にむかいます。そして車の窓を開け手を振ってくれるのでした。赤いランプが光り、車がゆっくりと坂道を下って行くのを確認すると、夫を無事に送り出せたことに少しほっとし、私は、まっさらな冬の空気をもう一度深く吸い込んでから、小さな扉を開け家に戻ります。

この穏やかな朝を守っていく事が、たったひとつ私にできる事なのです。私は全力で夫を支えたいのです。笑顔にしたいのです。

私達夫婦の間には、子供がありません。私は流産を繰り返し、とうとう彼を父親にしてあげることができなかつたのです。私達には、長い間、人知れず随分悩んだ日々がありました。

その頃の私には、街で赤ちゃんや幼い子供を連れた幸せそうな家族をみかけると、思わず目を伏せていました。涙が溢れてくる事もありました。なるべくそういった

場所を神経質に避けてきましたし、テレビ番組なども、差し障りのない物を選びました。彼もまたそんな私を気づかい、そういう環境になるべく触れないようにと、何気ない風を装いながらも配慮してくれていたように思います。そしてなによりも、夫に申し訳ないという思いが、どこにいても何をしても、消える事がありませんでした。周りの人を悲しませる存在など、この地球上のどこにも居場所などなくて当然だと、自分を責めました。

どんよりと曇ったような毎日をどうする事もできず、私は眠れなくなり、家から出る事も少なくなりました。窓をダンボールで覆い、世間から過剰に身を守ろうとしたり、髪をバラバラに短く切ったりもしました。

けれど、そんな時でも、夫は私の手を決して離しませんでした。何も言わずただひたすら優しくいつも傍に居てくれました。私にとって夫の変わらない優しさは何よりも強く、頼もしいものに感じました。そして私は、そんな夫が大好きでした。

長い年月、ふたり支え合い、寄り添い、やっとの思いで生きてきましたが、それと同時に気がつけば、いつのまにかお互い以前よりずっと強い絆で結ばれた、唯一無二の存在になっていたのです。

そして、そんな私達の想いを周りのの方が理解して下さいようになり、静かに温かく見守って下さるようになったのです。

私には本当に何もできないけれど、その分ふたり、ただ信じ合い仲良く寄り添うことで、誰かを温かな気持ちにできればそれだけで幸せではないかと、十年以上の長い年月をかけてやっとそう思えるようになったのです。

そして、嫉妬や憎しみから心を解き放ち、自由な気持ちで街を歩くと、それだけで、不思議だけど今までとは全く違う世界が見えてきたのです。素直な気持ちで生きたら、すべてのものが美しいのです。花も空も川も。そして、赤ちゃんや子供連れのご家族の幸せそうな笑顔をみていると、こちらまで幸せな気持ちになれる事を、初めて知ったのです。

夫や家族だけでなく、道ですれ違った人、同じバスに乗り合わせた人、レジ係の店員さん、話はしなくてもほんの少し微笑みながら、気づかいながら、同じその場に居合わずだけで、温かな空気が広がるのでした。

そして、そう思うようになって、しばらく経ったある日の事です。

三才ぐらいの女の子の手を引き、赤ちゃんを乗せたベビーカーを押すおかあさん

が、百貨店の扉を開けるのに苦労されているのが見え、私は思わず慌てて駆け寄り扉を開けてあげました。どこにでもある些細な事です。けれどその時、私は入り口から少し離れたATMの列に並んでおり、勢い良く駆け寄った為か、「ママどうしたの？誰？」女の子が少し驚いた様子でした。

「扉を開けてくれたのよ。優しい人ね。りようちゃんも大きくなったら、ああいう人にならないとだめなのよ。」の列に戻る私の後ろから、お母さんの声が聞こえてきました。

私は胸がいっぱいになりました。こらえきれなくなって、涙がこぼれました。通りすがりのこんな私の事を、子育てで精一杯のはずなのに、あんなふうに話して下さった、そのおおかさんの言葉に、今までの辛い気持ちが救われたように思いました。もう以前のように哀しい涙ではありません。それは、すべての苦しみから、本当に自由になれた瞬間だったのです。

私はこれまでの長い時間を、哀しい思いにとらわれて生きてきました。けれども、夫の愛情と、周りの方の優しい気持ちのおかげで生まれ変わる事ができたのです。生きていればいろんな事があり、美しい素直な気持ちを持ち続ける事は、とても難しい事だと、今でも思います。それでも、どんな苦しい時も、大切な人を信じる事で、すべての悲しみが幸せへと姿を変えていくはずですよ。

私達は昨年、この桜並木の坂道の上にある小さな家に引っ越してきました。夫を送り出し後片付けをすませ、ふと窓の外に目をやると、たくさんの家々の屋根はもうすでに朝日に照らされ輝いています。花も葉もまとわない木々もまた美しく、セピア色の冬の森に溶けてしまっそうです。また、夜になると星が美しく、

「星がきれいだよ。見た？」

夫は晴れた日は必ずそう言いながら小さな扉を開けて帰ってきます。

私達ふたりに素晴らしい森の風景を与えてくれたのは、長い間の辛い日々なのかも知れないと、私はそう思うのです。何もできなかったけれど、ただ逃げ出さず、十分に苦しみを受け入れた事だけは、ほんの少しだけ自分を褒めてあげたいと思います。

そして、今日も仕事で帰りが遅くなった事に焦りながら、誕生日のケーキを抱えて、

「星が綺麗だよ！」
あなたはそう言って帰って来てくれるでしょう。私は、そんなあなたを心から愛してやみません。

五十一才の誕生日は、新しい石けんの香りいっぱいに包まれていました。